

## 第4章 考察 環状土製品について

### I はじめに

本遺跡の5号住居址では、カマド焚口火床部より環状土製品と管状土製品が1点ずつ出土した。これらの土製品については、その形態から或ものを模造した土製品と考えられる。一般的に土製の模造品は、祭祀遺物として扱われることが多く、本資料に付いても同様な扱いが妥当と考えられる。

この場では、本遺跡出土環状土製品と同様な形態的特徴を持つものが出土した遺跡を取り上げ、その出土遺構や他の伴出土製品について触れてみたい。本遺跡出土例を含め同様な形態的特徴を持つものは、数は少ないが5遺跡で確認できた。

### II 各地の類例

#### 1 茨城県土浦市二又遺跡出土例(第21図1)

遺跡は、花室川から派生した谷津が刻み込んだ、標高20mの舌状台地上に位置する。調査面積が狭いため集落の様子は不明である。1辺7.5mを越す大型の5号住居址の、カマド焚口火床部より環状土製品と管状土製品が1点ずつ出土した。それぞれ完形である。本住居址の時期は6世紀後半と考えられる。管状土製品については切子玉又は棗玉を模したものか。

本資料は断面円形の粘土紐を環状に円め、その末端をつまんで接合させたものである。末端の接合部は丁寧にナデられず、その痕跡が明瞭に残っている。最大径は外側で2.7cm、内側で1.55cm、重さ2.5gである。

#### 2 茨城県稲敷郡桜川村尾島貝塚出土例(第21図2)

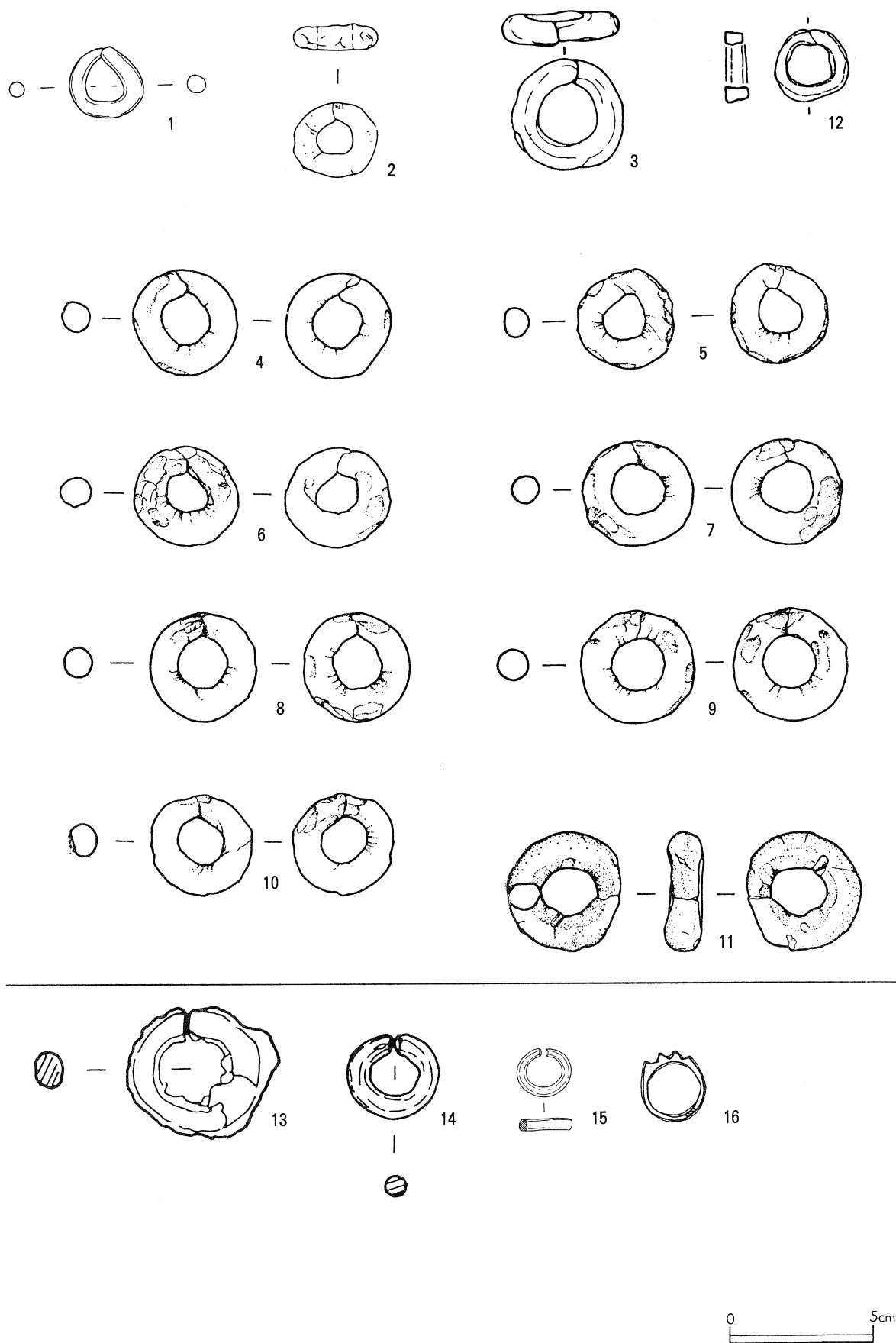
遺跡は、霞ヶ浦内唯一の島であった浮島の東端、標高3～5m前後の砂洲上に存在する。この遺跡は、尾島神社と近接し、古くから滑石製模造品が多数採集され、祭祀遺跡として知られている。

1986年の県道の改良工事に伴い調査が行われ、竪穴住居址や掘立柱建物跡が確認された。そして土製模造品・手捏ね土器などが集中して出土した祭祀遺構や、滑石製模造品製作工房も確認された。土製品を中心とした祭祀遺構の時期は、6世紀後半を中心としたものと考えられる。

環状土製品は、H16h1-11区の祭祀跡及びH16i3-6区の祭祀跡間のH16i2区から出土した。報告書内では「土製環状模造品」の名称で1点のみの出土となっており、完形品である。形状は断面円形を呈する粘土紐を環状に円め、その末端を接合したものである。接合部には明瞭な接合痕が残る。最大径は外側で2.8cm、内側で1.2cmである。重さは5.0g。

調査エリア内からは、手捏ね土器や鏡形・鋏形等の土製模造品や石製模造品が多数出土しているが、土製模造品の集中する場所から石製模造品の出土は少ないようである。

本遺跡は茨城県内を代表する祭祀遺跡といえる。そして、過去の研究ではこの祭祀遺跡の性格を、単なる在地祭祀の痕跡とするのではなく「大和王権の公的祭祀場」と解釈する向きもある(註1)。



第21図 環状土製品の類例と参考資料

### 3 福島県いわき市夕日長者遺跡出土例(第21図3)

夕日長者遺跡は太平洋までせり出した丘陵上に位置し、海岸線からの距離はおよそ2kmを測る。環状土製品(報告書では土製環とも表記される)が出土したのは第5号住居跡で、遺跡内で最も住居跡数が増える古墳時代後期栗圀式期とされ、7世紀前半に比定(註2)されている。

環状土製品は、第5号住居跡のカマド袖西側から土製の模造鏡や丸玉と一緒に出土した。住居跡内から出土した祭祀関連遺物は、土製模造品として鏡5点・環状土製品1点・勾玉5点・白玉2点が出土し、滑石製模造品として双孔板1点・単孔板1点が出土している。

この環状土製品は断面円形の粘土紐を環状に円め、その末端を接合させたものである。その接合部には明瞭に接合痕が残る。最大径は外径で3.9cm、内径で2.1cm、重さ11.28gである。

第5号住居跡の出土状況については、報告書内で「単なる室内祭祀とすることはできず、郷戸単位における共同祭祀」の想定がされている。

この環状土製品については後の研究で、土製の「耳環」と表現されている(註3)。

### 4 千葉県千葉市上ノ台遺跡出土例(第21図4～11)

遺跡は千葉市の北端に位置し、標高15～18mの東京湾に面した下総台地縁辺にある。発掘調査は区画整理事業に伴い行われたもので、1973年から1976年まで3次にわたり実施された。調査エリア内からは、古墳時代の堅穴住居跡が332軒確認され、古墳時代後期を中心とするものである。

環状土製品が出土した遺構は、W-46住居址、2A-53住居址である。これらの資料を報告書の凡例では「環状土製品」と表記し、本文中では「土製耳環」・「環状土製品」が用いられている。

W-46住居址では環状土製品が7点(第21図4～10)出土しており、いずれも完形である。住居址床より1点、カマド南床より2点、カマド東床より3点、カマド西床より1点出土している。4は外径3.7cm・内径1.8～1.7cm・厚み1.0cm・重さ13.1g、5は外径3.5～3.4cm・内径1.5～1.55cm・厚み0.9cm・重さ12g、6は外径3.7～3.45cm・内径1.45～1.4cm・厚み1.15cm・重さ12.45g、7は外径3.9～3.7cm・内径1.85～1.75cm・厚み1.0cm・重さ14.2g、8は外径3.8～3.7cm・内径1.85～1.72・厚み1.02cm・重さ12.25g、9は外径5.0～4.9cm・内径1.8cm・厚み1.1cm・重さ16.9g、10は外径3.55cm・内径1.6cm・厚み0.95cm・重さ12.55gである。いずれも完形である。いずれも接合部に明瞭に接合痕を残している。

この他、カマド南床より土製勾玉1点、カマド東床土製勾玉2点、カマド付近覆土より土製勾玉が1点出土している。これらは、本住居址出土の土器からすれば6世紀後半頃のものと考えられる。

2A-53住居址内には、2時期のカマドが作られ、貯蔵穴は3時期のものが確認されている。先のカマドは近接した時期のものと思われるが、貯蔵穴の1つは全く別遺構のものの可能性が考えられており、重複が激しいことがうかがえる。本住居址から環状土製品が1点出土した。

11の環状土製品は、貯蔵穴から出土したがいずれの貯蔵穴から出土したかは不明。外径は4.1～3.9cmで内径は2.0～1.65cmで、厚さ1.2cm、重さ14.9gで完形ある。「長さ約12、径1.2の棒状粘土の両端を接合し環状にした大型耳環。」とある。接合部に明瞭に粘土紐接合痕を残している。

この他、カマド1内灰層から滑石製剣形模造品2点、土製丸玉1点、土錘1点が出土している。同カマド床灰層から土製勾玉4点出土。また住居覆土からは土製勾玉2点が出土している。

環状土製品の廃棄時期は出土した土器からすれば6世紀前半頃のものか(註4)。

#### 5 山口県美祢郡秋芳町国秀遺跡出土例(第21図12)

遺跡は内陸部の嘉万盆地の北縁に位置し、瀬戸内海へと流れる厚東川と日峰川によって開析された扇状地の扇端部に立地する。調査は1991年の圃場整備事業に伴い行われた。その結果、県内最大規模を有する集落遺跡であることが明らかにされた。時期的には6世紀から8世紀代を中心とした集落構成となっている。特に6世紀から7世紀前半の竪穴住居址が一番多い。また、集落内でのスラグや銅鉱石の出土から、7世紀後半以降に銅及び鉄生産が行われていたことが明らかとなっている。

環状土製品は、西壁にカマドを持つ93号住居跡の南西隅付近から楕円形の土製模造鏡9点と共に出土した。報告書内ではここで言う環状土製品を「指輪の模造品」・「土製リング」と表現している。その形態は粘土紐を環状に円めその末端を接合させたものである。接合痕は明瞭に残されている。断面形は台形をなし、板などの上で製作したことが想定される。最大外径は2.6cm、内径1.5cm、重さは不明である。

本住居址の時期は報告書内では明確ではないが、7世紀前葉のものと考えられている(註5)。

### Ⅲ環状土製品・耳環・指輪(第21図13~16)

これらの環状土製品が何を模造したかについては、現状のところ上ノ台遺跡での報告等で見られる耳環ではという指摘や、国秀遺跡での指輪を模して作られたのではという指摘がある。形態的特徴からの判断では耳環の模造品としたほうが妥当と考えられる。それは耳環の切れ目の表現として、環状土製品の明瞭な接合痕が存在するのではと想定できる。切れ目としてではなく、明瞭な接合痕となっている理由としては、この土製品が模造品であり、正確に形態を真似る必要のないものであったためと思われる。形態的にはこのようなもので、ことは充分足り得たものと思われる。

また、環状土製品の断面形態の多くが円形であり耳環との関連性が指摘できる。耳環について言えば、全国的に古墳時代後期の古墳から多数出土しており、同期の竪穴住居址出土品にも往々に見られる。このことから、同期において重要な装飾品であり、重要な道具であることは間違いあるまい。

環状土製品の大きさについては、上記に示した資料からすると、大小2つ位のグループに分かれる。大きいもののグループは、夕日長者遺跡出土例と上ノ台遺跡出土例。この中で一番大きいものは上ノ台遺跡W-49号住居址出土の10が外径5cmを示し最大のものといえる。小さいもののグループとして二又遺跡・尾島貝塚・国秀遺跡出土例が外径2.5cm前後の大きさである。

ここで耳環について全県下の集成がなされた千葉県状況(註6)について見てみると、計測数値が分かるもので、最小外径のものは1.3cm、最大のものは4.8cmであり、外径2.3~2.6cmのものが多。第21図13~15は参考までに掲載したもので、13・14はつくば市中台遺跡第39号墳出土のものである。13は外径4.6~4.5cm、14は外径3.2~3.0cmである。15は土浦市寿行地古墳出土のもので、外径1.86~1.66cmのものである。

環状土製品の大きさの大小は、耳環の外径におけるばらつきの反映とも解釈できようか。

これに対し、古墳時代の指輪については、沖ノ島祭祀遺跡・新沢千塚古墳群第126号墳出土のものが有名であるが、耳環に比べ非常に出土例が少ない上に、形態が薄い板状のものがほとんどのもので

ある。そして、繋ぎ目(接合部)は極力消し去ることを心がけている様子がうかがえる。加えて装飾的であることが特徴と言えるであろう。

茨城県南地域出土の指輪の出土例として、稲敷郡桜川村柏木遺跡がある。遺跡内の7世紀前半の時期とされる9号住居跡から1点出土した。最大長2.5cm・内径1.9cmのもので、一部に鋸歯状の装飾が付き、装飾部分以外の断面形状は薄い板状を見せている。材質については、報告書の記載では金属と言うのみで不明であるが、写真の表面の状況から銅製と思われる。

千葉県下の指輪の状況では、多くが弥生時代のものであるが、外径1.9～2.6cmの範囲に収まっている(註7)。全体的な傾向として、指輪より耳環の方が外径に見る大きさの幅が広い特徴が読み取れる。

#### Ⅳ まとめ

最後に上記遺跡出土の環状土製品について全体的な特徴などについて述べたい。まず形態的な特徴では、いずれも基本的には断面形状丸い粘土紐を環状に円め、その末端の接合痕を明瞭に残している。この接合痕に関しては、意図して製作者が残したものと考えられる。これらの資料はいずれもほぼ完形品である。このような諸特徴や外径の大きさ等から耳環を模した土製品と考えられる。

これらの環状土製品を出土した遺構は、竪穴住居址が4遺跡で尾島貝塚のみが祭祀跡と祭祀跡の間隙から出土している。この他、一緒に出土した土製品に関しては二又遺跡以外では、直接伴出又は間接的に周辺から、複数の土製の模造鏡や玉類等と一緒に出土している。このような出土状況から、この環状土製品も祭祀にかかわる模造品と考えられる。そして、これらの出土品はカマドを中心とした位置から出土する場合が多い。この傾向は環状土製品のみの特徴ではなく、土製模造品全般にわたるものといえる。この特徴は竪穴住居址出土土製模造品を考える場合に重要なポイントとなろう。

これらの環状土製品を出土した遺構の時期については、多くが6世紀後半から7世紀前半の範囲内に入るものと考えられる。この6世紀後半から7世紀前半と言う時期は、前段階の滑石製模造品製作が終焉を迎え、土製の模造品が盛んに作られる時期でもある(註8)。

そして、環状土製品出土遺跡が存在する地域は、現状で国秀遺跡以外いずれも古代東海道東端付近の地域にまとまっており、興味深い状況を見せている。加えて国秀遺跡出土例の存在により、これらの環状土製品が出土数の多寡はあるにせよ、より広い範囲から出土する可能性も秘めている。

#### 註

註1 茂木雅博「浮島の祭祀遺跡」『風土記の考古学■常陸国風土記の巻』同成社 1994

註2 高松敏雄「福島県の祭祀遺跡」『東国土器研究』5号 東国土器研究会 1999

註3 矢島敬之「荒田目条里遺跡礼堂地区出土の石製・土製模造品ノート」『いわき市教育文化事研究紀要』第11号

(財)いわき市教育文化事業団 2000

註4 (財)千葉県文化財センター『千葉市榎作遺跡』千葉県文化財センター調査報告第216集 1992内の調査のまとめの時期区分  
第Ⅱc期から第Ⅲ期の土器様相に類似すると思われる。両者の時期のうち新しい方を想定した。

註5 三宅正浩「祭祀の遺跡と遺物」『まつるかたちー古墳・飛鳥の人と神ー』大阪府立近つ飛鳥博物館 1997

註6 千葉県文化財センター『研究紀要17ー県内の青銅製品の集成と分析ー』1997

註7 註6と同じ

註8 東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀ー祭祀関係の遺跡と遺物ー』第Ⅱ分冊ー東日本編Ⅱー関東地方 1993内の笹生

衛・小林清隆・神野 信「千葉県内における祭祀遺跡の状況」が参考。

#### 参考文献

- いわき市教育委員会『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市文化財報告第6集 1981
- 駒澤大学考古学研究室『千葉・上ノ台遺跡 先史14』「本文編」・「本文編2」1982
- (財)茨城県教育財団『尾島貝塚 宮の脇遺跡 後九郎兵衛遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第46集 1988
- (財)千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー5 古墳時代(1)』1990
- (財)山口県教育財団・山口県教育委員会『国秀遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告書第152集 1992
- (財)茨城県教育財団『柏木遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第74集 1992
- 東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ冊 1993
- (財)茨城県教育財団『中台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第102集 1995
- 土浦・出島合同遺跡調査会『寿行地古墳発掘調査報告書』1995
- 小沢 洋「房総の古墳後期土器」『東国土器研究』4号 東国土器研究会 1995
- 春成秀爾『歴史発掘4 古代の装い』講談社 1997
- 松本百合子「B耳飾」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣 1998